

# 雉子日記

堀辰雄

青空文庫



## 雉子日記

## 一

去年の暮にすこし本なんぞを買込みに二三日上京したが、すぐ元日にこちらに引つ返して来た。汽車がひどく混んで、私はスキイの連中や、犬なんぞと一しよに貨物車に乗せられてきたが、嫌いなステイムの通つていないだけでも、少し寒くはあつたが、この方がよっぽど気持が好いと思つた。

すっかり雪に埋もれた軽井沢に着いた時分には、もう日もとつぷりと暮れて、山寄りの町の方には灯かげも乏しく、いかにも寥<sup>さび</sup>しい。そんななかに、ずっと東側の山ぶところに、一軒だけ、あかりのきらきらしている建物が見える。あいつだな、と思わず私は独り合点をして、それをなつかしそうに眺めやつた。

ハウス・ゾンネンシャインと云う、いかめしい名の、独逸<sup>ドイツ</sup>人の経営しているパンション

が、近頃釜かまの沢さわの方に出来て、そこは冬でも開いていると云うことを、夏のうちから耳にしていたが、私がそれを見たのはついこの間のこと、——クリスマスを前に、二三日続いて、ひどい大雪があつた。そう、このへんでも五〇糶センチ位は積つた。そんな大雪がからりと晴れあがるや否や、鬱陶しく閉じこめられていた追お分わけの宿から、私はたまらなくなつて飛び出して、膝ひざまで入つてしまうような雪の中を、停車場まで歩いて、それから汽車に乗つて、軽井沢に来たが、ここでも軽便を待つのがもどかしく、勝手知つた道なので、近道をしよつとして野原を突切つたのはいいが、茅かやなんかの埋まるところは体が半分位雪の中に入りそうになつたり、いきなり道みち傍ばたから雉子きじが飛び立ったりして、何度も立往生せざるを得なかつた。やつと別荘のちらほらとある釜の沢の方に出たら、道もよくなり、いままがた通つたらしい自動車の轍わだちさえ生ま生ましくついている。どこかの別荘に来た奴のだなと思ひながら、その轍たどを辿つていったら、やがて山にかかると、それが消え失せ、その代りに男女の足跡らしいのが入り乱れてついているので、更にそれを追つて行くと、釘くぎづけになつた数軒の別荘の間から、私の前に突然、緑と赤とに塗られた雛ひな型がたのように美しい三階建のシャレエが見え出した。南おもては一面の硝子ガラス張りだが、それがおりからの日光を一ぱいに浴びながら内部の暖気のためにぼうつと曇り、その中から青々とした棕し

欄ゆろの鉢植をさえ覗かせている。——近づいて標札を見ると、「Haus Sonnenschein」とある。ふん、こいつだなと思つて、私はその家の前を何度も振り返りながら、素通りして、裏の山へ抜けようとしかけたが、頭上の大きな樅もみの木からときおりどつと音を立てて雪が崩れ落ちてくるのに目が開けられないほどなので、又、引つ返してきた。その時ふいに、クリスマスに來たいと言つてきた阿比留信にこんなところに泊まらせてやったら愉快がるだろうと気まぐれに思い立つて、そのままずかずかと裏木戸から這はい入つて、台所を覗いて見ると、ストオヴの側で白いエプロンをかけた日本人の若い娘が卓の上に水仙の花を惜しげもなく一ぱい散らかして、いくつかの花かびん瓶びんにそれを活かしていたが、私の意を伝えると、きのう主人夫婦も横浜から來たばかりで、何でも、もうクリスマスには大ぜいな客があるように申しておりますけれども、……まあ、中へおはいりになってお待ち下さい、と人懐こそうに私の方をまじまじと見ながら、そう言い置いて、奥へ引つ込んでいった。私はもうそんなことはどうだつていいんだと云つたような、ぼうつとするような氣持で、好い匂いのするストオヴに頬を赤くしながら、真白いエナメル塗りの台所の一隅に片寄せられてある、男と女の長靴から、さかんに湯氣が立ちのぼっているのを見入っていた。……

## 二

いま、私の暮している追分ときた日には、村中で商いをして居るのは、村はずれの居酒屋みたいなのと、煙草や駄菓子なんか売っているのと、たった二軒。——正月こつちへ来てから、無精を極め込んで、一度も髭ひげをあたらずにいたが、或る日、ぶらりと軽井沢まで汽車に乗って理髪店に行った。軽井沢の町だつて、いまは大抵の店は何処どこかへ店ごとそっくり荷送されでもしそうな具合に、すっかり四方から荷箱同様の板を釘づけにされている。唯二三軒、うす汚ない雑貨店みたいなのが、いまでも店を開いているが、そんな店先にもクレエヴンやペル・メルの罐かんが店たなざらしになつて居るのは、さすがに軽井沢らしい。郵便局の横町にある理髪店に飛び込んで髭をあたつて貰う。南を向いた店先には一ぱい日がさし込んで居る上に、ストオヴを自棄やけに焚たいているので、苦しいくらい熱い。この店は夏場は五つか六つ鏡が並べてあつた筈だが、いまはたった二個、——そうして他の鏡のあつた場所は、何処かの別荘のお古らしい、バネの弛ゆるんでいそうなベッドが占領している。ここでこの親方は、客の来ない時は昼寝でもしているのだろう。——私の向つて居る凸凹のある鏡には、筋向うの、やっぱり釘づけにされた、そして横文字の看板だけをその上にさらし

出している、肉屋と、支那人の洋服屋が映っている。おや、何だか見覚えのある奴が通るぞ。なあんだ、テニス・コオトの番人か。やあ、こんどは自動車が通る。毛唐けいとうの奴らが鮪すしづめになつていやあがる。ふふん、さてはハウス・ゾンネンシャインの連中だな。鏡の中に映らないが、自動車が何か引きずってゆく音がする、何だい？ と訊きいたら、櫛そりですよ、と親方は無雑作に答える。

それからいそいで理髪店を飛び出すと、きつとゴルフ場へでも行つて櫛で遊ぶのだろうと思つて、そつちへ行つて見ようと、まだ雪の大ぶ残っている町の裏側の「水車の道」へはいつて聖パウロ・カトリック教会の前まで行きかけたけれど、道は悪し、なんだか面倒くさくなつて、その筋向うの裏口からホテルに飛び込んで、お茶を飲まして貰う。勿論、客なんか一人もない。そこで軽便の出るまで、ホテルの娘と無駄口をききながら、ストオブに囁かじりついていた。

追分の宿に帰つたら、思いがけず田部たなべ重治さんが来ていられた。越後えちごの湯沢とかへ兼かねつ常ねさんやなんかとスキイに行かれたお帰りだとか。皆と高崎で別れて、お一人だけわざわざこちらに寄られた由。——茶の間の大火燧こたつの上で、鳥鍋とりなべをつつきながら、誠ちゃん（宿の主人）も加わつてよもやまの話。——田部さんは本当に追分がお好きらしい。こと

にこんな風に一杯聞こし召されようものなら、誰に向つても、追分のいいことを繰返し繰返し語られる。僕なんぞはもういい加減耳に聒<sup>たこ</sup>が出来てもよさそうな筈だが、一向聞き倦<sup>あ</sup>きもせず、にこにこしながら会<sup>あいつち</sup>槌<sup>つち</sup>を打っているのだから、これも不思議だ。

たかが浅間山の麓<sup>ふもと</sup>で、いくぶん徳川時代の古駅<sup>おもかげ</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>をそのまま止めているというよりほかに何の変哲もない、こんな寥<sup>さび</sup>しい村が、一体何でそんなにいいのだろうか？ と他の人が聞いていたら、思うかも知れない。

この間、辻<sup>つじむら</sup>村伊助の「スウイス日記」を読んでいたら、リルケがその晩年を送りながら「ドウイノ悲歌」を書いたシャトオ・ド・ミユゾオのある、ロオヌ河のほとりの、ラロソという村なんぞは、汽車で素通りしている。ああいう旅行者にとっては、取るに足りないような寒村が、かえって詩人にとっては仕事をよく実らせてくれるのかも知れないのである。

## 三

浅間山だけがすっかり雪雲に掩<sup>おほ</sup>われ、その奥で一人で荒れているらしく、この山麓<sup>さんろく</sup>の

村なんぞには、日が明るく射しながら、ちらちらと絶えず雪の舞っているようなことがある。そんな時なんぞ、どうかして不意にその雲の端が村の上にかかると、南に連なった山々のあたりにはくつきりと青空が見えながら、村全体が翳<sup>かげ</sup>つて、ひとしきり吹雪<sup>ふぶ</sup>く。と思うと、すぐ又、ぱあと日があたってくる。ここでは、そんなような空合いの日がかかなり多い。

田部さんがリュックを背負って帰って行かれた七日の夕方も、そんな雪<sup>ゆき</sup>催<sup>もよ</sup>いだった。途中の落葉松<sup>からまつばやし</sup>林のはずれまでお見送りして、其処から一人で帰ってきながら、私はこの村にこうして一人で氣儘<sup>きまま</sup>にいられるのを幸福に思わなければならぬのかな、と考えたが、それにはいささか、半信半疑だった。

それから二三日立ってから、去年の夏この村で知合いになった英夫君が、正月になったら送ってくれと云って頼んで置いた空気銃を東京からわざわざ持って来てくれた。

翌日、一日じゆう二人で空気銃をもって森の中を駆歩いた。森の中はまだ雪が相当深い。これは狐の、これは兎の、それからこれは雉子か山鳥かどっちかだ、と雪の上に印せられている色んな足跡を、この間教えられたばかりのをおぼつかなく思い出しながら、そんなことを言い合っている間にいきなり私達の行手から飛び立つ鳥どもの羽音に、空気銃を手

にしていることなんぞちよつと思ひ出せない位に、びっくりしたりしている、即製の獵人たちの間抜けさ加減！ 一日じゅうの獲物といったら、たった頬白ほおしろが一羽。……

その翌日、英夫君は二時の汽車で帰るといので、昼飯を早目にすませてから、お別れに村の西のはずれの、分去わかされのところまでぶらつと散歩に行った。馬頭觀音ばとうかんのんやなんかはまだ雪の中にしよんぼりとしている。二人でその傍たたずに佇んで、しばらく浅間山の方を眺めていると不意に思いがけなく私達の頭上を、一羽の青味を帯びた大きな鳥が翼を水平に拡げたまんま、すうと低目に飛び過ぎた。やあ、雉子だ、雉子だ、と私達が言い合う暇もないうちに、街道の向うの小さな松林の中に、突然よろめくようになって、その雉子は下りて行つた。いそいで私達もその林の中へ躍り込んで見ると、もう飛ぶ力のなくなっているらしいその雉子は、難なく英夫君の手で生捕いけどりにされた。

何処も怪我はしていないようだが、大方鉄砲打ちに翼でもやられて、やつとここまで山の中から逃げて来たのかも知れない。雄だから、綺麗な尻尾しっぽをしていた。空気銃でも持つてきていたら、それで射とめたのだと宿に持ち帰つて威張れようが、あいにく手ぶらなので、へんな恰好で、そのままそれをぶらさげて帰つた。

英夫君に東京へお土産みやげにしたまえと勧めたが、帰るのはもう一日延ばして、こっちでそ

れを皆と一緒に食べて行きたいと云って聞かなかつた。

雉子はまだ辛うじて生きている。それを不自然な殺し方はしたくないので、宿の老犬ジャックを連れて、裏の林へ行つて、その雉子を放したら、昔猟犬だったジャックはその逃げようとする雉子を巧みに追ひ廻しながら、要領よく噛み殺し、羽だらけになった口に銜くわえたまま、それを私達のところへ持つて来てくれた。

雉子は悪食あくじきだから、肉が臭いと聞いていたが、鍋にしてもそれほどいやな臭いはしなかつた。が、なんだかすこし無気味で、あんまりうまいとも思わなかつた。

## 続雉子日記

英夫君が帰京してから、こんどは私は一人で毎日のように空気銃を手にして、ジャックを連れては、殆ど二三日おきぐらいに降るのでますます雪の深くなった森の中を愉快そうに歩きまわっていたが、少しその度が過ぎたと見え、とうとう十日ほど前から風邪かぜを引いて、いくじなく寝込んでいたらくである。枕もとにはお義理のように横文字の本を堆うずたか高く積んであるが、見ているのは大抵例の「スウイス日記」か、ベデカアのスウイス案内書位なものである。

この前の日記に、私はリルケが晩年住まっていたシャトオ・ド・ミュゾオのある村をラロンと書いて澄ましていたが、実はラロンはリルケの墓のある村の名で、同じヴァレエ州の同じロオヌの川沿いながら、ミュゾオのあるのはそれより少し下流に位している、シエルという小さな町から更に上方へ入った、葡萄畑なんぞの真ん中らしい。そしてそのミュ

ゾオもシャトオとはほんの名ばかり、むしろ十三世紀頃に出来た小さな塔のようなものであるらしい。

一九二一年の秋のことである。それまでスイス中を転々としながら、長い間中絶されている「ドウイノ悲歌」を再び続けるべく、そのために外界と遮絶しやぜつして、全く一人きりになっていられるような隠れ場所を捜しあぐねていたリルケは、遂に伊太利との国境にもはや近いヴァレエ州にやって来て、その何処どこかプロヴァンスや、また西班牙スペインの或る物をさえ思わせるような一帯の風物を一目見るや、此処こここそ自分の求めている場所と信じて、その町の一つのシエルに暫く滞在し、附近を捜しまわったがそれも空しく、とうとうその町をも立ち去ろうとする間際になって、偶然或る飾窓に売物に出ている一つの塔の写真やかたを認めた。それは彼の或る友人の寝台の上の壁に以前から掛けていた絵の中の古い館やかただった。そしてそれがミュゾオだったのである。それを彼はその同じ友人の世話によって漸く手に入れることが出来た。

\*

「恐ろしい山々の荒蕪たる風物の中に全く孤立せる小さな館。……私はこれまでかかる孤独な存在、かかる沈黙との極度の親密を想像だに出来なかつた。親愛なるリルケよ、あなたは純粹時間の中に閉じ籠こもっているように私に思えた……」と、その頃其処そこを訪れたポオル・ヴァレリイは書いている。

翌年の二月である。十年前の、一九一二年ドゥイノにて着手せられ、一九一四年以来殆ど全く中絶していた「ドゥイノ悲歌」は遂にそのシャトオ・ド・ミュゾオにおいて完成せられた。しかもそれは僅か二三日で出来上つたのである。

それを書き上げた夜半、リルケはもうペンを握る力もない位に疲労しながら、眠る前にその出版者キツペンベルクにその完成を知らせてやつた手紙には甚だ人の心を打つものがあるが、その一節に曰く、「……私は冷たい月光の中に出て行きました。そして小さなミュゾオを大きな獣のように愛撫してやりました……かかるものを私に授けてくれた、その古い壁を。それからまたあの破壊されたドゥイノをも。」（ドゥイノは大戦中に伊太利軍のために破壊された。）

それから数日と立たない裡うちに引続いて又、その支流とも云うべき小さな作品が殆ど求めずして出来た。「オルフォイスに捧ぐるソネット」と呼ばれる五十余篇のソネットがそれ

である。

それまでもとかく健康のすぐれなかつたリルケは、その仕事の過労のためにいよいよ健康を損ねてゆき、その後殆どそのミュゾオに居ついたまま、僅かな詩作と、二三の翻訳をしたくらいで、遂に一九二六年十二月の末に死んで行つた。死んだのは、しかし、その愛するミュゾオではなく、発病後強いて移されたレマン湖畔のモントルウの療養所である。

病名は壞血症というものだそうだが、その病氣の直接の原因になつたと云われる、いかにもリルケの最後らしい、美しい挿話を、私はつい最近読んだ。

\*

或る日、リルケはミュゾオを訪れることを予め約束してあつた一人の婦人を待つていた。その婦人は約束の時間よりもやや遅れてやつて来たが、それを待つている間、リルケはその客に与えようとして、庭に出て薔薇を摘んだ。（ミュゾオの庭には、詩人が自分の手で百株ばかりの薔薇を植えていたのである。）その時その薔薇の棘が彼の手を傷つけた。そしてその何でもなかつたような小さな傷が次第に悪化して行つて、遂に壞血症の原因にな

つたと云うのである。「つねに女性の偉大さと薔薇の美しさを説いていた詩人はかくして一女性のために摘んだ薔薇の一つに刺されて死んで行ったのである。その最後がいかに痛ましくあつたとは云え、それはリルケがかれ独自の死を死すべく選んだものであつた、」とその話の筆者は云う。

そのミュゾオの館の庭には、いまでも詩人の手植の薔薇が咲いているそうである。私がい他日スウイスにも行けるような身の上になれたら、何よりも先に、そのミュゾオの館と、それから詩人の墓のあるラロンの村とを訪れることだろう。

が、それはいつのことやら……。私はそれよりかは、本はとづくに買い込んで置きながら、まだ手をつけていない、そしてリルケ自身も「長い、時としては骨の折れる読書」と云うその「ドウイノ悲歌」を何とかして克服せんことをこそ思ふべきであろう。

## ノオト

「雉子日記」のなかで、私は屢々しばしばミュゾオの館やかたのことを持ち出したが、それについて富士川英郎君から非常に興味のあるお手紙を頂戴した。「ミュゾオの館」というのは、御承知のようにリルケがその晩年を過した瑞スウイス西のヴァレエ州にある古い「Chateau」のことである。その見もしない「Chateau」のことなんぞを私はいろいろと知ったか振りをして書いて見たのであるが、富士川君の注意によつて、二三此処に訂正して置きたいと思うのである。

先ず、その「Chateau du Muzot」の読み方である。私はそれを普通にシャトオ・ド・ミュゾオと発音していた。ところが富士川君の注意によると、リルケ自らが一九二一年七月二十五日にマイリ・フォン・トゥルン・ウント・タクジス・ホオエンロオエ夫人に宛てた手紙のなかにそれをMuzotteと発音してくれと書いてあるのだそうである。恐らくそれ

がその地方特有の呼び方なのであろう。勿論、Muzotte は富士川君も言われるように、仏蘭西式にミュゾットと発音するのだろう。従つて私の用いていた「ミュゾオの館」は「ミュゾットの館」と訂正されなければならない。

以上はその館のほんの名称のことだが、富士川君はその名称のことから更に、その前述の手紙の中でリルケがいろいろとその館の構造や由来について詳しく語っている由、まだその手紙を見ていない私に懇切に書いてきてくれたのである。——それによつて私はもう一つ訂正して置いた方がいいと思う箇所を発見したが、私はその詩人の愛していた古い館をただ漠然と十三世紀頃のものとして書いていたが、その頃から残っているのはその建物の根幹だけで、それから何度も建て直され、現存している天井や家具の多くは十七世紀頃のものらしい。それからリルケがその館のさまざまな歴史を書いているうちに、こんな話があるそうである。

十六世紀の初め頃に、その館に Isabelle de Chevron という娘が住まっていた。その娘は Jean de Montheys という男と結婚した。が、それから一年立つたぬうちに、マリニヤンの戦いが起り、その夫はそれにはかなく戦死してしまった。若い寡婦かぶになったイザベルは再びミュゾットの館に引き取られた。やがてそのうちに彼女の前に二人の求婚者が現わ

れた。そしてその二人は決闘して、お互いに刺し合つて二人とも死んでしまった。その夫の戦死には耐えることの出来たイザベルも、それには耐え得ずして遂に発狂してしまったのであつた。そして夜毎にミイエジュにある二人の求婚者の墓まで、薄い衣をまとつたま彼女はさまよつて行くのだった。そして或る冬の夜、彼女はその墓場に息絶えていた：

リルケは死ぬとき遺言して、そのイザベル・ド・シュヴロンの眠りを妨げてはいけなから、ミュゾツトの近くのその墓地には自分を葬らないようにして貰いたいと言つたといわれる。……リルケの墓のあるラロンが、もう殆どシンプロンにも近い位、ずっとロオヌの谷を遡<sup>さかのぼ</sup>つたところにあることは、私が前にも書いたとおりである。その墓の写真が、去年の「インゼルシッフ」のクリスマス号に載つていたそうだが、それもまだ私は見る機会を得ていないのである。



# 青空文庫情報

底本：「堀辰雄集 新潮日本文学16」新潮社

1969（昭和44）年11月12日発行

1992（平成4）年5月20日16刷

入力：横尾、近藤

校正：松永正敏

2003年12月12日作成

2010年9月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雉子日記

堀辰雄

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>